



414  
A 189

支那日本  
 横濱十一月十九日刷行新聞紙ヨリ  
 出兵ノ事ヨリ起リタル支那日本ノ紛  
 議無事ニ濟ミタルハ是下ホ其詳細ヲ聞知セ  
 ラレタレヘク日本人ハ極メテ喜ビテニ濟ミ  
 ルヲ悦ビル言ハテモナク又紛議  
 以来日本人ノ舉動ハ甚ク新  
 奇ナルヲリ何トナレ  
 シ運輸ノ用ニ充ツル  
 世許ノ費シト概  
 船  
 應ニ今ヲ費シ



大正十一年四月  
侯爵邸寄贈

ハウズカニ生息シドシメタル者多ク  
恒田外務大臣ノ手紙

4009





そは千石士族

人上気ヲ振

ヲ思フ 政府ヲ輔ケ

ヲ救ツキテ軍ヲ復ハシ

吾國勢頗ル危険ニシテ當時

ハ國ノ為ニ大害タリシナリ即チ子

國內改良ノ用ニ配当シタル金額

費耗スヘク今日既ニ已ニ大患ナル税ノ上ニ尚

ニ税ヲ課セタルハカラス今日廢止シテ通用ス

ル幣幣高既ニ十分ニ達シ居ルニ更ニ多キヲ

加ヘタルハ又家初支取ニ對シテ 廢置

ろ

ニ就キリニ 國內有名ノ人等ノ異ナ

ルニ今 自ラ相和スルニ至レリ然レトモ之ヲ

シテ相和セシムルハ今日焦眉ノ急務ニモ非サ

ルヲハ斯ク大費ヲ顧ムシラ之ヲ為セシハ實ニ

嘆息スハキナリ抑以支那一條ニ初メ内閣

中ノ所見區々ナリシハ今判然

シ初メヨリ衆論一致セシナ

クイ更ニ手強クシナ

者今度ハ好結

ハナリ 簿 凱定ニ



満

其

支那ヨリ拂出スニ定マ

國相論シテ終ニ之ヲ償金ト

云々

シ及ヒホルモサ島、

シタル道路ノ價ト謂フハ

相譲スルノ名ハ支那ノ國威ニ

モ傷ムハサル様西便トイフ事ヲ

云々然レ必ス純然タル支那

此國ニテハ大勢支那ヲ以テ無力

ル能ハスと思ヘリ先頃北京ニテ

マリタル事ヲ十分ニ議シタル

ニ入ラサレハ余輩斯ク言フタル

ニ就キ確定ノ説ヲ出ツルハサ

争論ノ片附ハ日本使臣ト支那

ニ破レタル後切迫ノ時ニ方

引ノ懇切ナル報ニテ

シテ日本政府モウ

意由

シ

シ

シ

シ

ろろ



時天子陛下親臨  
トノ國ノ為ニ尽力

テハ此意ヲ北京在留ノ英公

教語テリクノ事トモ古那ハ

位ニ相附ケラレタカ余英洋ナ  
ノ知ラサレ

トモ蓋シ北京内閣ニテ李鴻章ノ威權名望ヲ如

ムト又党ノ恐レアルト北西ニ敵アルト此三ノ

者コトハハ拂ヒテ無事ニ論ヲ収メタル真ノ源

回クルヘシニ急草ハ支那人ニシテ魏祖、郭定

ろ々

ヲ好ム者ニ非ニ其武名甚ク大ナルガ日本ニ比

スレニハ穀多キヲ以テ支那必勝ト定メ、竊ニ日

本ト戦争ヲ開クヲ悦ビ戦ニ勝テハ李氏ノ威名

増大ナヘク此ノ如クナレハ前日反党ノ死灰

再タニ燃ユルニ至ルヘキナリ

日本自進手英回ノ大ナル旨

事ニ濟ミタル一件ニ就キ其

ヲ看客ニ為シテナクハ

其模様ニ記スルヲ

モ



就ニハ費ハ 高五

自入レタル船ノ價テ

アリ兵器ノ價ノ精算

ヨリ出ヌ所ノ七十萬弗ヲ以

ル所ハ格別ノ數ニ非ズ然レ

非常備金ノ條ニ四千七百萬弗ノ 額アリ而

テホルモサ一條ハ丁度其項ニ釀セシナレハ右

ノ金額ハ其終万一ノ時ノ費用ニ除ケラ道キタ

コレ迄シテ故ニ其國勝利ヲ得テ内外ニ對シ其功

ナキニシテ非レトモ 今年ノ勘定ハ

ウケ

前年ニ於テハシ余輩ノ希望スル所ハ國ノ

爲ニシテ善報ト爲ルニキ注意ヲ以テ之ノ安進輕

舉セヌ深ク遠大ノ圖ヲ慮リテ注意ヲ連スルニ

必要ナル方略ヲ撰ニ方略定テラハ人材ヲ撰ニ

篤ク信シテ之ヲ成ス程ニ五ルニ人ハ手絶

位ニあるル務ハ弁レテ決シテ之

ル者ニシテ猶悍者ニ乘テ戰

トシ其人量力ヲ用ラニ

且ハ余輩ハ多ク働クニ 其 確ホト 見

信シテ之ヲ成スル 見



基礎  
五年以内日本へ進出  
彼ノ水道ノ源ルト云フ  
方ヨリナリ  
鍛煉スヘシ  
鍛煉スヘシ  
鍛煉スヘシ